

## 花 木 の 花 成 に 関 す る 試 験

(第1報) ユキヤナギの花芽分化と促成におよぼす標高の影響について

吉 田 俊 一・後 藤 利 幸

(大分県温泉熱利用農業研究所)

ユキヤナギの花芽分化と促成におよぼす標高の影響について検討したのでその結果を報告する。

## 1. 材料および方法

試験Ⅰ 花芽分化について; 供試品種は早生高性と蒲田早生を用いた。試験場所は標高850mの飯田高原と170mの当所であった。1975年3月26日に定植し1975年8月23日から1976年2月26日までの間、原則として10日間隔で10芽ずつ採集し、70%エタノール中に貯蔵後順次とり出して解剖顕微鏡で検鏡した。

試験Ⅱ 促成について; 試験Ⅰと同一の品種、ほ場、養成株を用いた。供試株の掘り取り、入室日は1976年11月30日と1977年1月21日の2回であった。すべての株を鉢植にして、最低夜温を12~21℃に保った温室に入室後シリンジを行い、灌水は慣行に従った。11月30日入室区は850m区と170m区としたが、1月21日入室区はさらに11月30日に山下げた仮植区も加えた。供試株数は11月30日入室区が各区3株、1月21日入室区が各区1株ずつとし、各株よりそれぞれ新梢3本を用いた。

## 2. 結果および考察

試験Ⅰ; 花芽分化は850m区では2品種とも9月12日に開始したが、170mでは早生高性が9月22日、蒲田早生が10月14日に開始した。分化の開始時の気温は早生高性の850m区では最低温度15.3℃であり、170m区では20.8℃であった。蒲田早生は両標高区とも最低温度15℃程度であった。また、花芽の発達は850m区では2品種とも11月4日に70%が花粉・胚珠形成期に達したが、170m区では蒲田早生が11月23日に、早生高性が12月5日にそれぞれ80%が花粉・胚珠形成期に達した。

試験Ⅱ; 11月30日入室区の促成結果は第1表のとおり品種で差はあるが高冷地による促成効果は認められた。しかし、標高にかかわらず出荷可能な開花率(12月~1月出しでは90%以上)には達しなかったため、この時期の入室は実用的でない。1月21日入室区の促成結果は第2表のとおり、早生高性では入室後16日目の2月6日には開花率は仮植区が最高で83.3%、ついで850m区は78.9%、170m区の66.7%となり、いずれの区も出荷可

能(2~3月出しでは70~80%の開花が必要)となった。また、仮植区は他の区に比べて開花の揃いも良好であった。切花の品質は170m区が最もすぐれ、ついで仮植区であったが、850m区は寒害のため枝先や花芽に枯死が認められやや品質が劣った。蒲田早生では仮植区の促成効果が最も高く2月6日の開花率は91.1%であり、ついで850m区の85.6%、170m区の46.7%であった。仮植区と850m区は2月6日には充分出荷できるが、仮植区の方がやや早く出荷でき、170m区は実用性が低い。切花の品質は標高による差がさほどなかった。

以上の結果から、ユキヤナギの花芽分化は高冷地の方が早く分化し始め、発達は早いことが明らかである。また、促成については11月30日入室ではまだ休眠が破れにくく実用的でないことがわかった。さらに、1月21日入室では早生高性は850m区は開花率が高いが寒害と生育が悪いことから、仮植区や170m区の方が実用的である。蒲田早生は耐寒性があり、仮植区が最も早く出荷でき、850m区でもさほど品質は劣らなかったが、170m区はやや開花率が低かったため高冷地向きの品種と思われる。

第1表 11月30日入室区の開花率(試験Ⅱ)

品 種	標 高	12月	12月	12月	12月	12月	1月	1月
		10日	15日	20日	25日	28日	4日	12日
早 生 高 性	850	0	0	0.7	14.1	21.5	26.7	30.0
	170	0	0	0	0	0	0	0
蒲 田 早 生	850	0	0	17.0	25.2	25.9	30.7	34.1
	170	0	2.2	14.4	17.0	21.8	25.9	29.2

第2表 1月21日入室区の開花率(試験Ⅱ)

品 種	標 高	1月31日	2月6日	2月12日	2月19日
早生高性	850m	0	78.9%	83.3%	83.3%
	170m	0	66.7	71.0	73.3
	仮植区	0	83.3	90.0	90.0
蒲田早生	850m	0	85.6	85.6	85.6
	170m	0	46.7	47.8	47.8
	仮植区	31.1	91.1	91.1	91.1